

ガーニャール朝期イランにおける都市変容 都市 間の比較分析を通して

著者	近藤 百世
号	19
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第181号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00120451

論文内容要旨

ガージール朝期イランにおける都市変容
—都市間の比較分析を通して—

東北大学大学院 国際文化研究科
国際地域文化論専攻 イスラム圏研究講座

近藤 百世

指導教員 黒田卓 教授
指導教員 大河原 知樹 准教授

【研究目的】

本論文の目的は、ガージャール朝期（*doure-ye Qājār*, 1786 - 1925 年）に起こった変化・変容の内実を明らかにすることである。具体的には、都市の分析を通して内部に起こった変化・変容の具体的事例を示し、それらがどのような経緯でもたらされたのか、あるいは他の地方に影響を与えたのかについて、都市間のつながりから読み解いてくものである。そして、現代のイラン＝イスラーム共和国（*Jomfūrī-ye Eslāmī-ye Īrān*, 以下、イラン, 1979 年～）の基盤を形成した時代といえるガージャール朝期の変化の実態を明らかにする。

本論文では、次の 3 点の問題意識を背景としている。まずは、近代化の基礎を築いた時代としてガージャール朝に注目する必要性があること。次に、イランの歴史研究において、都市研究の視点が必要であるということ。そして、地方都市ガズヴィーン（*Qazvīn*）について、研究の充実を図る必要がある点である。

1 点目については、ガージャール朝期を通して起こった変化を理解することが、現在のイランをとらえる際に重要であると考えためである。ガージャール朝期は、列強の影響力や時代の変化により、新しい文物の流入や中央集権化政策など、近代化の萌芽が見られる時代である。イランの近代化そのものは、続くパフラヴィー朝期（*doure-ye Pahlavī*, 1925 - 1979 年）に達成されたものであるが、その下地はガージャール朝期に行われた様々な試みの中から始まっている。そこで本論文では、ガージャール朝期を後の近代化のための布石を打った時代と位置付けて、この時期に起こった変化・変容に注目している。

2 点目については、乾燥気候の都市が持つ特徴を考慮した上で、変化・変容を考察する必要があると考えるためである。イランのような砂漠地域においては、近代化によって都市間交通が発達する以前は、大部分の都市がいわゆるオアシス都市として自立的な性格を有していたため、都市を一つの単位として考察する必要がある。そして、ガージャール朝期は、中央集権化事業によって交通網や通信網が整えられたことでこの性格が変化した時代であると考えられる。特に、都市間交通・情報の整備で人とモノの流れが加速し、物理的・心理的な距離が短縮されたことは、それまでの都市の在り方に変容をもたらしたと考えられる。本論文では、この点について、都市間交通と都市内交通に注目して議論を進めている。

3 点目については、都市ガズヴィーンへの注目の必要性が挙げられる。ガズヴィーンは、歴史的にも重要な町であるにも関わらず、大規模な発展を遂げなかったために、研究対象としての注目を集めてこなかった都市である。しかし、サファヴィー朝期に一時的に首都になるなど（1544 - 1597 年）、イラン史全体におけるガズヴィーン的重要性を考慮すれば、その価値を再評価し、研究を充実させる必要性があると考え。また、本論文の論点に則していえば、ガージャール朝期の人とモノの流れを考察する上で、ハブ都市としてのガズヴィーン存在には特異な点が認められる。そして、その分析はガズヴィーン一地方に留

まらず、イランの地域研究ならびに王朝史研究においても意義のあるものであると考えられる。

以上のように、本論文はガージャール朝期という近代化を目前に控えた変化の時代において、イラン内部でこれらの影響がどのように受け止められ、波及し、変容をもたらしていったのかを、都市とそれらのつながりに注目することで明らかにするものである。本論文の意義は、王朝史や政治・思想といった大きな視点からではなく、都市という具体的な視点からこの時期の変化・変容を描き出す点にある。都市構成（ハード面）の変化を追いながら、それが都市社会（ソフト面）の変化にどのような影響を与える／受けるのか分析することを通して、イランにおける都市の近代化について、立体的な考察を行う。

【本論文の課題】

本論文の課題は、ガージャール朝期の変化を、都市変容の側面から考察することである。具体的には、ガージャール朝期の改革事業を通して、首都テヘランと地方都市ガズヴィーンが、どのような変化・変容を遂げるかを明らかにし、それらの動きがどのような影響から生じたものかを考察する。その上で、ガージャール王朝の近代化政策が、都市とそこに住む人々にどのような変化・変容をもたらしたのかを考察する。

対象期間は、変化・変容を大きな流れの中で捉えていくために、ガージャール朝期全体となるが、適宜その前後の時代も考察対象となる。また、大きな変化が見られる第2代君主ファトフ・アリー・シャー（Fath ‘Alī Shāh, 在位 1797 - 1834 / A.H.1212 - 1250 年）の時代から第5代君主モザッファロッディーン・シャー（Mozaffar od-Dīn Shāh, 1896 - 1907 / A.H.1313 - 1324 年）の時代までの約 100 年間についての考察が主となる。中でも、第4代君主ナーセロッディーン・シャー（Nāser od-Dīn Shāh, 1848 - 1896, A.H.1264 - 1313 年）の統治期間は、変化・変容の転換期となるため、議論が集中している。

【本論文の構成と内容】

本論文の構成は下記の通りとなる。序章と終章を除き、2部4章構成になっている。大まかな流れとして、第1部（第1章・第2章）でガージャール朝期の全体的な変化を概観し、第2部（第3章・第4章）ではその動きが地方都市にどのような影響を及ぼしていたのかを考察する形で議論が展開されている。

【第1章】

第1章では、ガージャール朝期のイランが置かれた政治状況と、それにあわせて起こった改革の試み、背後で動いていた経済状況を確認した。ガージャール朝の成立と勢力拡大

の時期にあたる 18 世紀末から 19 世紀前半にかけては、ロシアの南下政策と、それを阻止しつつ自国の権益を拡大しようとするイギリス・フランスとの覇権争いの時期と重なった。イランはその流れに巻き込まれる形で様々な影響を受け、少しずつ変化を遂げていった。特に、列強の影響力が強まる中で、ヨーロッパの近代性と邂逅したことは、イランにそれまでの時代には見られなかった新しい変化・変容が起こるきっかけとなった。本章では、この時期にイランで起きた変化や変容を考察するために、当時の政治状況、その中で起こされた改革の動き、イラン経済の変化に分けて整理し、その流れを確認している。

第 1 節では、イランを取り巻く世界情勢が国内情勢にどのような影響を与えたかについてまとめた。イランは、北からロシア勢力が、南からイギリス勢力が侵入する中で国境線が確定され、列強の影響下に置かれていった。ガージャール朝宮廷は、当初対露路線を基軸として親英と親仏の間を揺れ動き、イラン・ロシア戦争（第 1 次：1804 - 1813 年、第 2 次：1826 - 1828 年）を契機として親露派に傾いた。そして敗北と不平等条約による莫大な負債によって、列強への従属化が進んだ。この出来事は、その後のイランの国際的地位や国力を著しく低下させ、国内での不満を増大させた。また、ロシアの南下に伴って、境域の町であるタブリーズ (Tabriz) やカスピ海地方の重要性が高まったため、イラン北街道が重要な街道となっていった点が確認された。

第 2 節では、イランにおける改革事業の流れをまとめた。イランにおける改革の試みは、イラン・ロシア戦争の前線基地となったタブリーズで始まり、後に首都テヘラン (Tehran) で展開していったが、いずれも単発であり、長期的な改革の機会には恵まれなかった。そして、財源確保の難しさや周囲の圧力などから、イランにおける改革が、これらの動きを牽引できる大きな力を持った個人に拠るところが大きかった点が確認された。イランにおける近代化の動きは、小規模な変化の積み重ねが最終的に変容につながるという形で進展したのである。

一方で、改革や国家予算の財源確保のために利権譲渡が促進され、列強への従属を強めている。ただし、これらの利権によって外国資本による国内のインフラ整備が進み、結果としてイランの近代化が促進されたという面もあった。そして、外国資本による整備の前に、アミーレ・キャビール (Mīrzā Taqī Khān Amīr-e Kābīr, 1807 - 52 年) の駅停整備や、ナーセロッディーン・シャーによる電信線敷設プロジェクトなど、イラン独自の近代化の努力が存在していたことを再確認した。

第 3 節では、イランの経済と社会の変化についてまとめた。ガージャール朝が成立した時期のイラン経済は、ヨーロッパ製品の流入によって流通が変化し、産業構造が変化していた。その影響を受けて、社会階層も、商人層の台頭が起こるという変容の時期を迎えている。イランの政治はロシア・イラン戦争を経て列強への従属化を強めるが、経済の従属化は利権譲渡が加速する 1870 年代から深刻な問題となっている。更に 20 世紀末にはロイ

ター利権を契機として海外資本の銀行が設立され、イギリス・ロシアがイラン金融的へ本格的に進出し、そのコントロール下に置かれていくという局面を迎えている。

イラン経済が世界経済に包摂されていくきっかけとなったのは、イスタンブルを介したイギリス・ロシア間の貿易収支がイギリス側の赤字となったことが直接の原因となった。この不均衡を解消するために、イギリスは、タブリーズを介した交易ルートを開発して、イランとの交易を開始した。この時、イランの産業構造が変容し、それに伴って商人層の台頭が見られた。その後、絨毯貿易が始まり、国際取引をする大商人が現れてくるようになる。しかし、この交易はイギリス・ロシア双方に利益をもたらす一方で、イランの貨幣流出と国内貨幣の質低下の問題を引き起こしていた。これらの不満が国内の改革運動や、後の立憲革命へつながっていったのである。

【第2章】

第2章では、これらの近代化事業によって都市構造がどのように変化したのかを、首都テヘランを中心に概観し、それらの変化が地方都市に及ぼした影響について考察した。テヘランは元々シルクロードの中継都市であったレイ（Rey）近郊の寒村の一つであった。そして、レイの荒廃に伴って相対的に重要度が上がり、サファヴィー朝期に都市へと発展し、ガージャール朝期に首都となった比較的新しい町である。そして、ナーセリー期（*doure-y e Nāserī*, 1848 - 1896 年）の大改造がきっかけとなり、変容が生じている。この大改造の背景には、人口増加や経済活動の活発化だけでなく、当該期間中に行われた改革、列強からの影響、ナーセロッディーン・シャー自身の西洋趣味などが存在した。また、テヘラン大改造は単に都市の構造を変化させ、都市空間を変容させただけでなく、人とモノの流れを変化させることで都市社会にも変容をもたらすきっかけとなっている。

第1節では、都市改造が行われる以前のテヘランの都市形成史についてまとめた。まず、テヘランの地理と水利条件をまとめ、都市の形成に水利が関与していた点を明らかにした。その上で、テヘランの発生からナーセリー期までの都市形成史をまとめた。そして、テヘランが、サファヴィー朝期にガズヴィーンへの遷都に伴って整備され、都市構成の基礎を整えられている点をまとめた。その上で、ガージャール朝期の3人の君主の統治期間について、都市構成と宮殿域の2つの視点からその造りをまとめている。そして、バーザール（*bāzār*, 市場）が宮殿域のある北西方向へ拡張され、それに伴って都市構成が充実してきた点。宮殿域のプランが基本的にサファヴィー朝期のプランを利用する形で発展してきた点を確認した。

第2節では、ナーセリー期に行われたテヘラン大改造（1867 - 1874 年）について考察を行った。前提として、大改造直前の都市と宮殿域の構成についてまとめた。この時期には更に建造物が増えて、空間が過密化している点を確認された。そして、大改造による変化・

変容をまとめた。この大改造は、ヨーロッパの都市計画、とりわけ第2帝政期のオースマン（Georges-Eugène Haussmann, 1809 - 1891 年）によるパリ都市計画を意識して行われたものである。この大改造によって、テヘランの都市域は約3倍に拡大し、外観も八角形のシンメトリックな形へと変容している。特に、トゥープハーネ広場（meidān-e tūpkhāne）を中心に都市交通網が形成された点が重要であると認められた。そして、この都市内交通は、新設された大門を中継して都市間街道とつながっており、都市間交通との結びつきが完成した点も確認された。更に、このトゥープハーネ広場の周囲に軍事・情報・教育・金融・外交のための建造物が次々に建てられ、新しい中心が形成されて、テヘランの近代化が進められる点も示されている。

宮殿域については、テヘラン大改造時に敷地の北側が解放されたため、規模が縮小したことを確認した。しかし、その内側では、3期に分けてナーセロディーン・シャーによる改造が行われており、構成が充実している点も確認された。テヘラン大改造の時期に重なる第1期には、南東部にシャムソルエマーレ（shams ol-‘emāre）や王立のテキエ（tekīy e-ye doulat）といった、シャーの西洋趣味を反映した建造物が出現した。そして、第2期にはシャーの居所の改築が行われ、第3期には後宮が改築されるなど、内廷域の充実が進んだ。

第3節では、建造物の変化に注目して、他都市での変化について考察した。まずは、ファトフ・アリー期（doure-ye Fath ‘Alī Shāh, 1797 - 1834 年）に行われたシャー・モスク（masjed-e Shāh）のプロジェクトについてまとめた。これは、交通の要所にシャー（Shāh, 王）の名を冠したモスクを建てるプロジェクトである。そして、その第1の都市として選ばれたのが、北街道の主要都市であったガズヴィーンであった。次に、サファヴィー朝期以降増加したモスク・マドラサ複合体（masjed-madrased, モスクとマドラサを同空間に設置する複合建造物）についてまとめ、宗教的建造物の建築空間に変化が生じていた点を確認した。そして、ガージャール朝期以降起こった世俗的建造物の増加について考察を行った。

【第3章】

第3章では、地方都市ガズヴィーンの都市構成と特徴をまとめた。ガズヴィーンは地理的・歴史的な条件から、大規模な人口を抱える程度まで成長を遂げ切ることのできない都市であった。特に水利の問題が都市の規模や構成に大きな影響を与えており、ガズヴィーンにおいては他の都市に比べてより水利施設の重要度が高かった。しかし、ガズヴィーン交通の要所としての重要性は、形を変えながらガズヴィーンの存続を支え、常に一定規模の都市として存在し続ける要因となってきた。

繁栄の点からみると、ガズヴィーンはサファヴィー朝期に首都となり、首都移転後、栄えることなく現在に至ったように見える。しかし、ガズヴィーンは、ザンド朝期から再び

交通の要所としての価値を認められるようになっていた。複数の主要な都市や交易路のハブとなったガズヴィーンはガージャール朝にも重視されている。特に、境域となり、皇太子の居所が置かれたタブリーズと、カスピ海交易の拠点であったラシュト（Rasht）の2都市とテヘランを繋ぐという意味で、ガズヴィーンは重要な中継都市となっていた。そのため、ファトフ・アリー期にはテヘランに先んじてシャー・モスクが建てられ、ナーセリー期にはシャーの御幸や外国使節の往来の拠点の一つとなり、他の都市に先駆けて、テヘランとの幹線道路が整備されている。

第1節では、ガージャール朝期に至るまでのガズヴィーンの諸状況について概観し、当地の自然条件と水利条件を整理した。その上で、ガズヴィーンが他都市と比べて水利条件が悪く、ガナート（qanāt, 導水暗渠）の本数に大きな変動が見られない点、アーブ・アンバール（āb anbār, 地下貯水槽）の創建が集中した点を指摘した。そして、ガズヴィーンの都市形成史をまとめ、都市域の成り立ちについて整理した。

第2節では、サファヴィー朝期にガズヴィーンがどのように発展したのかについて、都市構成と宮殿域に分けて考察した。ここで、サファヴィー朝期にガズヴィーンの北と西側の街区が開発され、都市域が確定した点が明らかとなった。また、宮殿域の開発によって、ガズヴィーンが中心がこの場所に移った点も確認された。同時に、ナーセリー期の再整備によってこの時代の建造物で失われているものが多い点も確認されている。

サファヴィー朝期の変化・変容について、重要なものを列挙すると次のとおりである。まず、慣例的に施政者の居所であった場所にチェヘルソトゥーン宮殿（kākh-e Chehel Sot ūn）が創建され、宮殿域が整備された点が挙げられる。次に、町の北部から西部にかけて開発が行われ都市域が拡大し、チェヘルソトゥーン宮殿がその中心に置かれる形で、町の形状そのものが変容したことも重要であった。この変容によって、都市域が現在の旧市街といわれる部分にまで拡大され、市壁が建造され、現在に続く基礎が形成された。また、この時期にディザジ川（rūdkhāne-ye Dizaj, Bāzār）がラシュト門（darvāze-ye Rasht）外に移設されたことで、西の境界が拡大し、西と北の街区が開発されて現在まで続く街区の基礎が形成された点も明らかとなった。加えて、バーザールの再整備によって経済発展の基盤が整えられた点や、水利施設が整備された点、セパフ通り（khiyābān-e Sepah）が創建され、町に目抜き通りが出現した点も確認された。また、シーア派の台頭と関連した建造物の増改築が行われ、ガズヴィーンの有名な巡礼地であるシャーザーデ・ホセイン廟（ārām gāh-e Hosein b. ‘Alī Mūsā or-Rezā, Shāhzāde Hosein）が再整備され、現在の形となったのがこの時代であったことが確認された。そして、この時期にテキエ（tekīye, 殉教劇を上演するための専用劇場）やホセイニーエ（hoseiniye, エマーム・ホセイン追悼のための建造物）が創建され始めた点も確認された。

第3節では、ガージャール朝期の都市構成について概観した。都市域の構成と、都市内の導線について確認した上で、街区構成を明らかにした。特にこのまとめは、これ以降のガズヴィーンの分析の基本となっている。

第4節では、ガージャール朝期の都市社会について考察するために、ナーセリー期に行われた人口調査（1880/1 - 1881/2, A.H.1298 - 1299 年）の分析を行った。これは、テヘランで行われた人口調査と異なり、正確な調査とは言い難いものであったが、ガズヴィーン初の人口調査として、ガージャール朝期の様子を伝える重要なデータである。この分析を通して、ガズヴィーンの人口が北側街区に集中している点が明らかとなった。北部に行くほど世帯の種類も増える傾向にあった。これに加えて、ウラマー・セイエド・有力者（‘olam ā, sādāt, ahl-e honar）の世帯、王族（shāhzādegān）世帯は中央や東側にもまとまった居住が見られ、名士・文官（a’yān, ahl-e qalam）層、商人（tojjār）層は西側にもまとまる傾向が見られることも明らかとなった。そして、この傾向について考察し、ガズヴィーンでは、政治的・宗教的な勢力が町の東側に、土着的・経済的勢力が西側にまとまる傾向にあったと結論付けた。

【第4章】

第4章では、ガージャール朝期のガズヴィーンの都市変容を、建造物の創建・修繕事業に注目しながら概観した。ザンド朝期にバーザール周辺の北西街区に宗教的建造物、水利施設、商業関連施設などの創建・修繕が始まっていた点から、この時期にガズヴィーンの再興が始まっていたことを確認した。また、アーガー・モハンマド期（doure-ye Āqā Mohammad Khān, Shāh, 1747 - 1797 年）からモハンマド期（doure-ye Mohammad Shāh, 1834 - 1848 年）にかけて、これらの活動が南北に広がった点が示された。そして、ナーセリー期に入ると、テヘラン＝ガズヴィーン街道の整備事業の影響を受けて都市内の人とモノの流れが加速して都市構成が変容し、モザッファリー期（doure-ye Mozaffarī, Mozaffar od-Dīn Shāh, 1834 - 1848 年）にはこの流れを受け継ぎつつ、ガズヴィーンに新しい時代を象徴するような建造物が建てられ始める、という一連の流れが明らかとなった。

第1節では、ガージャール朝勃興の時代にあたるザンド朝期からナーセリー期までの推移についてまとめ、この時期、キャラントル（kalāntar）のモウラー・ヴェルディー・ハーン（Moulā Verdī Khān）によって町の北西街区の再開発が行われていた点を明らかにした。そして、ファトフ・アリー期の知事ロクノッドウレ（‘Alī Naqī Mīrzā Rokn ol-Doule, 第2・4代知事）の任期中に、王朝とのつながりが強くなった点を指摘した。この時期は、サルダールのモスク・マドラサ（masjed madrase-ye Sardār）やサーレヒーエのモスク・マドラサ（masjed-madrase-ye Sālehīye）など、宗教関連施設の創建が相次ぎ、大型のアーブ・

アンバールの創建が集中するなど、ガズヴィーンの都市社会が充実していた点が明らかにされている。

第2節では、ナーセリー期の都市変容について考察し、テヘラン＝ガズヴィーン街道の整備がガズヴィーンに都市変容をもたらした点を明らかにした。ここでは、街道整備の監督官であったサアドッサルタネ (Bāqer Khān S‘ad os-Saltane, 第25・27代知事) がこの事業を背景に力をつけ、ガズヴィーンにメフマーンハーネ (mehmānkhāne, 迎賓館) やサアディーエ (Sa‘īye, 宿場・バーザール・商館・浴場・邸宅を含んだコンプレックス) を始めとした様々な事業を行って、当地で力をつけていったこともまとめている。そして、このメフマーンハーネの創建に併せて、ガズヴィーンでは都市内交通が整備され、都市間交通とつながられて人とモノの流れが加速した点を示した。そして、この時期以降、テヘラン門 (darvāze-ye Tehrān) からテヘラン通り (khiyābān-e Tehrān) を抜け、メフマーンハーネを経由し、セパフ通り、ペイガンバリーエ通り (khiyābān-e Peighambarīye)、ラシュト通り (khiyābān-e Rasht) を抜けてラシュト門から、ラシュトもしくはタブリーズへ向かう街道とつながるという導線が出現したのである。

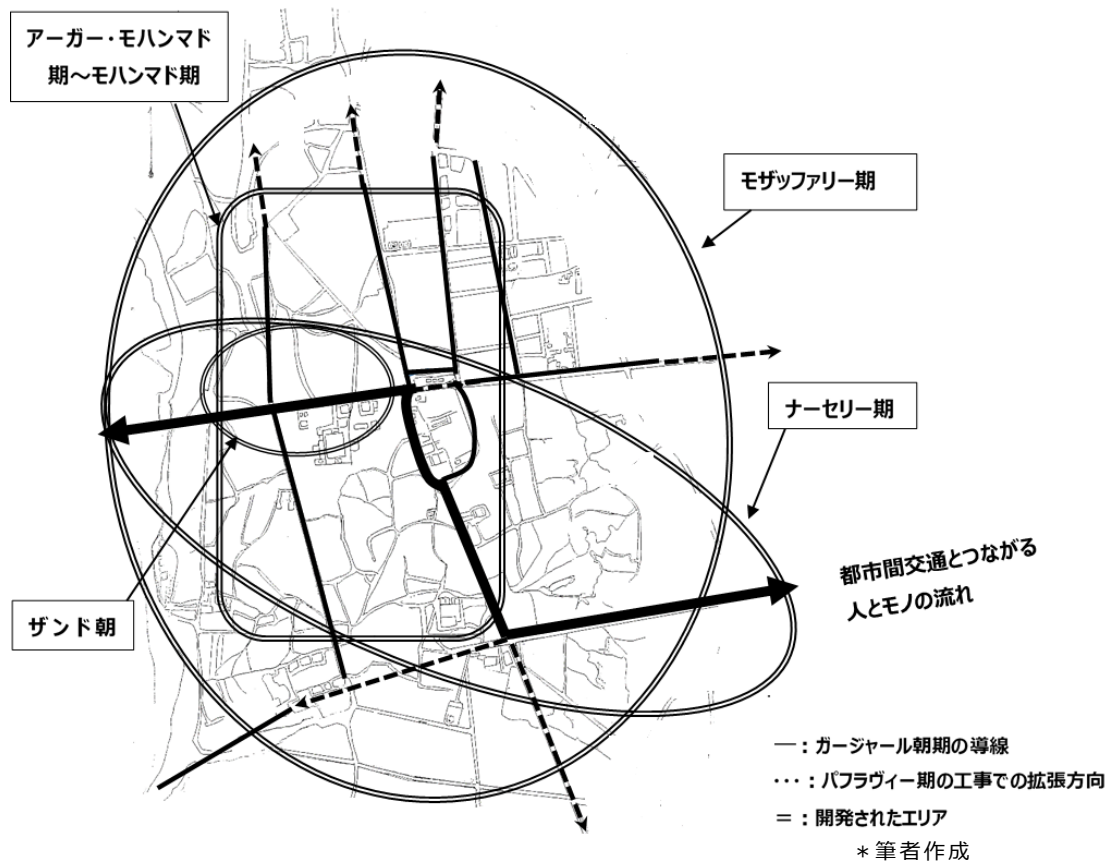
第3節では、ガージャール朝末期のガズヴィーンについてまとめた。この時期のガズヴィーンの変化・変容は、サーラーレ・アクラム (Mīrzā Sāleh Khān Tabrizī Sālār-e Akram, 第31代知事) が教育協会 (anjoman-e ma‘āref-e Qazvīn) を発足させたことがきっかけとなっている。この教育協会が主体となり、ガズヴィーンには何軒かの新式学校 (madrase-y e jadīd) が建てられた。特徴的であったのが、ガズヴィーン初の新式学校オミード校 (madrase-ye Omīd) のために、宮殿城南東部の敷地が提供された点である。ここは宮殿の正門アーリー・ガープー門 (sardar-e ‘Ālī Qāpū) の隣にあたり、メインストリートであるセパフ通りに面するというガズヴィーンの都市構成上重要な場所であった。このことから、新式学校設立が、ガズヴィーンの都市社会に大きな影響を与えていたと考えられる。ガズヴィーンのエデュケーション協会の歴史的意義は、ガズヴィーンの有識者・識者を団結させたことで、地元民が主体的に都市社会の変革に関わる機会を提供したことにある。町の有力者が自主的に活動できる組織を作り上げたことは、ガズヴィーンの後継者に大きな影響を残したといえる。また、この協会の構成員が、ガズヴィーンジャーナリズムを担う存在になっていたことも間接的とはいえ、サーラーレ・アクラムの功績の一つに数えてもよいだろう。

【本論文の結果と課題】

本論文を通して、ガージャール朝期の都市に起きた都市変容について、首都テヘランの都市形成に関する概要と、地方都市ガズヴィーンに関する詳細が明らかとなった。特にガズヴィーンについては、ザンド朝期からガージャール朝末期までの長いスパンでその変化・変容を追うことができた。そして、ガズヴィーンにおける開発が、ザンド朝期に北部・西

部の街区から始まり、アーガー・モハンマド期からモハンマド期にかけて徐々に町の南北に広がっていったことが分かった。そして、ナーセリー期に人とモノの流れに沿って都市構成の変容が起こり、モザッファリー期までに、この流れに沿いながら、全体に開発の手が及ぶようになった点も明らかとなっている（図 1）。

図 1：ガージャール朝期ガズヴィーンの開発区域概念図



また、ガズヴィーンにおける建築活動については、ファトフ・アリー期のロクノッドウレ、ナーセリー期のサアドッサルタネ、モザッファリー期のサーラーレ・アクラムといった、知事によるイニシアティブがあった点も明らかとなった。特に、都市変容をもたらしたテヘラン＝ガズヴィーン街道に関わる事業を行ったサアドッサルタネの功績は大きい。

本論文から見出された課題として、次の 2 点が挙げられた。1 点目は、他の地方都市における変容についても明らかにし、その累積によって、ガージャール朝期の中央集権化事業が、イラン全体ではどのような動きを見せるのか考察していく必要性である。もう 1 点は、ガージャール朝期がイランの近代化に果たした役割についての考察である。これについては、パフラヴィー朝期に行われた近代化事業後の都市構成との比較を行い、伝統的な都市と近代的な都市の差異について考察していく必要があるだろう。

論文審査の結果の要旨

学位の種類	博士（国際文化）	氏 名	近藤百世			
学位論文の 題 名	ガージャール朝期イランにおける都市変容 ー都市間の比較分析を通してー					
論文審査担当者氏名 (主査) 黒田 卓 , 大河原知樹 , 藤田 緑 野村啓介 , 勝山 稔 ,						
論文審査の結果の要旨（1,000 字内外） <p>本論文の主たる目的は、ガージャール朝期（1786～1925 年）イランに生じた、都市にまつわる諸側面の変化及び変容を仔細に跡づけることによって、同朝の歴代国王（シャー）や地方知事が主導的に取り組んだ中央集権化を志向する改革事業、ヨーロッパ諸列強との接触・対峙を契機とした新しい事物・制度の摂取が、都市の物理的構造や都市民の社会構成・意識にどのような変化をもたらしたかを可能な限りにおいて可視的に示し、その背景を考察するものである。</p> <p>より具体的には、ガージャール朝成立とともに首都に選定され、その後巨大メトロポリスとして急成長したテヘランと、前代のサファヴィー朝期に中部のエスファハーンに遷都が行われるまで同朝首都の機能を果たしていたものの一時衰退に向かい、ザンド朝期からガージャール朝期にかけて首都と副都タブリーズを連結するハブ都市として再興してきた都市、ガズヴィーンという2つの都市に着目し、それらの長期にわたる変遷に焦点を定めている。</p> <p>本論文の研究手法上の特色としては、ペルシア語の王朝年代記・回顧録・旅行記、地方史誌などの史料解読を中心に、各種地図の分析、建築史や人文地理学などの分野の現地調査成果報告書、及び本論文著者自身による現地フィールドワークより得た知見も活用され、決して豊富とは言えない文献ソースを他分野での成果も取り入れて総合的に分析する手法を採っている点があげられる。</p> <p>本論文は、序章と終章を除き、2部4章構成となっている。第1部（第1章・第2章）ではガージャール朝期、およそ150年の国内外の政治情勢、経済的な状況が概観され、それらの動きと関連させつつ、首都テヘランの成り立ちから都市の発展を追い、続く第2部（第3章・第4章）では中央における改革とそれに連なる首都改造の動向が地方都市、とくにガズヴィーンにどのような影響や波及効果を生み出したのかを、構造と変化に注目して読み解くことを試みている。</p> <p>まず第1章では、イランを取り巻くイギリスとロシアの外交戦略を基軸にした国際情勢の推移とその過程で何回かの英露両国への敗北によるイランの従属的地位への転化、イラン国内における政情不安や改革派高官による中央集権的改革事業、とくに留学生派遣による西欧知識の移入、軍隊・官僚制度の合理化、メディアや西欧式の高等教育の創出、さらにイランの世界経済システムへの包摂やその結果としての経済・財政的な従属化などが概観され、その中で道路網や通信網の整備により都市の独自性が弱化的ことが指摘された。</p>						

第2章では、首都テヘランの都市変化を国王治世期毎に、大きく宮殿域と、それ以外のガナートなどの水利施設、モスク・マドラサ・墓廟・テキエ（受難劇上演の劇場）などの宗教施設、バーザールや商館・キャラバンサライのような商業施設などの都市域に二区分し、両地域における空間的過密化や市域の北部郊外への拡大をまとめ、とりわけ都市計画に基づく首都大改造事業について考察を加えた。この改造期を境として、都市間交通と都市内交通が結びつき、都市に動線が出現することに注目した。さらに、ガージャール朝期前半には主要街道の整備とガズヴィーン、サナンダジュ、カーシャーンなどの交通上の要衝の復興が政策として推進されたことが強調された。

第3章では、ガズヴィーンに焦点を絞って、建造物・不動産の変化を、テヘラン同様に宮殿域や都市域に機能別に分類し、それらの軌跡を丹念に追跡するとともに、水利条件などの環境的側面や歴史的変動、街区・都市内道路網などの都市構造、人口構成などについて詳述した。とくに、この都市については、ササン朝期の起源からサファヴィー朝にかけての都市の外形・内的構成を概念図も多用しながら解明したこと、ガージャール朝期に首都に続いて実施された人口調査の統計資料に拠って多角的に分析したことは注目に値する。

第4章では、ガズヴィーンの都市変容に主にスポットライトを当て、その変容の要因について考察を試みている。その結果、1) ザンド朝期からガージャール朝初期にかけて都市の有力者や住民による都市再建が盛んになったこと、2) それと並行して、ガズヴィーンの命綱とも言うべき水利施設たる地下貯水槽アーブ・アンバールの創建が相次いだこと、3) 19世紀後半以降のテヘラン＝ガズヴィーン街道整備事業とそれと連動した都市内交通及び機能別エリアの創出、4) 20世紀初めの教育協会の創立と初等学校建設運動、などが都市を変貌させる契機であると指摘した。

以上より、本論文の研究成果により新しい知見として見出された点は以下の通りである。第一に、従来一般的にイランの都市について想定されていた自律性・分散性は、王朝や地方知事の集権化を志向する施策を通して、ガージャール朝期を通じて一貫して薄められる傾向にあり、それが同朝初期から着手されていたことを、都市という目に見える場にフォーカスすることで明らかにしたこと。

第二に、テヘランとガズヴィーンという歴史を通して相補的な役目を負わされてきた両都市の在り方を長いスパンにおいて追究しその連動性を炙り出したこと。とくに、概念図も含め各時期の地図を多数作成し、そのハード面での変化を可視的に明示したことは都市研究における独創的な貢献と見なしうること。

第三に、ガズヴィーンそれ自体の都市研究は、まとまったものが世界レベルでも皆無に等しく、水利施設をはじめとする都市のハード・ソフトの両側面での分析は今後の研究の基盤的素材になりうるものであること。また、その変化を主導的に起こした、地方知事の事績にも新しい照明を当てたところは優れた点である。

一方、審査委員会においては、都市変化に考察が集中するあまり、近代化の捉え方やそれが都市変化の中にどう読み解けるのかなど、掘り下げがやや不十分であること、文献の引用や文献表作成に若干不備が見られることなども指摘された。しかし、審査委員会は上記のことを総じて見るなら、本論文は、著者が自立して研究活動を行うに必要な高度な研究能力と学識を有していることを示していると判断した。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。